

問屋町の女

(上巻)



花登筐

屋町の女
(上巻)



花登筐

集英社

問屋町の女 上巻

一九八三年六月二十五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 花登 筐

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区、ツ橋二一五—一〇
郵便番号 一〇一—

電話 出版部(〇三) 二三八—二八四二
販売部(〇三) 二三〇—六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

問屋町の女 上 目次

引揚者 5

ハルピン街 43

母と商人 98

未亡人 143

苦渋 212

生きていた屍 268

装丁 装画
三村 成瀬
淳 数富

問屋町の女
上

引揚者

1

引揚船の中はうだるように暑く、悪臭に満ちていた。しかし超満員の引揚者達のどの顔も、まるで虚脱したかのようで一言も語らなかつた。

やっとこれで内地へ戻れるという安心感と、頼り先が焦土と化しているのではないかとの新しい不安とが交錯している為であろう。いや、この船が果して無事日本へ着くかどうかの何の保証もなかつた。

その引揚者の中にはハルピンに居た民間人達もかなり乗っていた。

昭和二十一年九月のことであつたから、終戦から既に一年が経っていた。

その間、日本人達はハルピンの各地区にグループごと

に別れさせられて不安と飢えと戦つた。

それも仕方がなかつた。

それは現地に住む民間人が一番知っていたからである。そして正式に帰国許可が出たのは終戦一年後のことであつた。

「無事に帰れるぞ！」

そんな歓びを現わす者も居たが、大半は半信半疑であり、事実大きな賭けでもあつた。

だから帰国許可が出た時、今まで知人や使用人であつた現地人に子供を託す者も居た。

「せめて子供達だけでも生かしてやりたい」

それが痛切な親の願いでもあり、同時にそんな民間人ほど、それまで現地人にいたわりを見せていた日本人であつた。

そして八月、引揚者達はハルピン駅から貨車で出発したが、新京駅でおろされると、そこからは歩き、野宿をしたのは、現地の占領軍の管轄が分かれていた為である。やがて奉天駅へ出て、やっと引揚船に乗れるまでには更に一ヶ月の期間を要した。

その間にも続々と死者は出たし、辛うじて気力で生きていた者も居たが、船に乗った瞬間、その船に日本人の乗組員を見て緊張感が解けたのか、枯木が倒れるごとく死ぬ者も居た。

そして、もの悲しい汽笛と共に港から離れると、子供を現地人に託した親達の中には「おろしてくれ！ 子供

が！」と叫んだ者も居た。

だが船はもう内地へ向つて進んでいた。

祖国日本の陸地が船から見えたのと知った時、

「よかった……」と呟いた女性が一人居た。

原本瀬利子なる二十二歳の女性であった。

岐阜にある夫忠一の実家に居た瀬利子が満洲へ渡つたのは終戦の一月前であった。

更にその五ヶ月前、ハルピンの満鉄に転勤すべく單身渡つた夫が、現地召集を受けたとの報が入つたからである。

戦局は次第に日本軍に不利になっていたし、瀬利子も夫の運命がどうなるか分からなかったから、せめて二人の子供を夫に見せておきたいとの一心であった。

長男は信男、三歳。そして長女の義子はまだ生れた直後であった。

しかし瀬利子が到着した時、夫の忠一は既に出征した後だった。

もう既に関門海峡の近くまで米軍の潜水艦が現われ輸送船も撃沈され、乗船許可を取るのにかなりかかったからである。そしてハルピンから帰ろうとしたが、更に難しく終戦を迎えたのである。

そして二人の子供は瀬利子が両手で抱ける程瘦せこけていたが生きてはいた。

夫の忠一がどうやらノモンハン方面へ行つたと知ると、せめて子供達だけでも、何としてでも無事連れて帰らねばと瀬利子は思つたのである。

ノモンハンへ向つた日本軍の殆どは死に、そして生き残つた兵隊達はシベリヤへ連れ去られたとの情報が伝わっていた。

いや、そればかりではなかった。岐阜に居る舅や姑達に、ハルピンの夫に顔を見せてやりたいとの決意を告げた時に、

「こんな子供達を連れて行つて、もしどうかなつたらどうする。どうしても行きたかつたらお前一人行きやえ。忠一には子供達の写真見せればええだろうが」

との言葉が耳にこびりついていたからである。そんな反対を押し切つて連れて行つた子供達の生命を、どんなことをしても守つて舅や姑達に見せねばならぬと思つたからである。

そして、その一年間ハルピンで瀬利子は必死で子供達を守つた。

馴染とてない異国の街で、僅かに支給される食料品を子供達に与え、辛うじて生き延びさせてきたのである。

しかし瀬利子は不安を抱いていた。何故ならば岐阜もまた爆撃を受けたとの情報を船の中で聞いたからである。

「おい！ 佐世保だ！ 佐世保が見えるぞ！」

引揚者の一人が、船底へ駆け降りて来てそう叫んだ時、思わずどよめきの声が起こり、我先にと甲板へ上がって行った。

しかし瀬利子は立てなかった。

抱いている義子がもう泣き声すらあげなかったからである。

「義子、義子、日本へ着いたのよ！ もう大丈夫なのよ！」と体をゆすぶった。

「どうした？」

その時、船室から最後に甲板へ上ろうとした中年の男が鋭い眼を向けた。

その男の顔は既に見知っていた。

引揚船の中でも何かとリーダーシップを取っている男であったし、その男がハルピンからの引揚者とも聞いている。

「子供が変なんです」

瀬利子も叫んだ。

「みんな変なんだわ」

そう言いながらも男は近付いて来て、義子を覗きこむと義子の体を掴んでゆきぶった。

「こりゃあ駄目だ。もう意識を失のうとる」

「意識を……」

「まあ佐世保に入港するまで持ちゃいいが」

男は瀬利子に義子を渡すと出て行こうとした。

「待って下さい！ 何とかしてくりゃあせ！」

瀬利子は縋るような思いで頼んだ。

男はその声に振り返ると、

「お前は名古屋か？」

と尋ねた。

「生れは尾張ですが、主人は岐阜でした」

「岐阜だと。岐阜のどこだ？」

「本庄です」

「それを早言え！ ここで待つとれ！ 今医者連れて来てやる」

「お医者さまが、この船に……」

「これだけの数じゃ。一人位はおるだろが！」

かの男が岐阜と聞いて豹変したかのように走り去るのを見ても、瀬利子是不審を感じる余裕もなく、ガタゴトと響くエンジンの音に合わせるように、

「義子死なないで！ 義子！」

と叫んでは体をゆきぶり続けていた。

それから五分も経たぬ内に男は「見つけたぞ！」と六十過ぎの男の手を引っ張って来た。

「この子じゃ。早診てやってくれ！」

老医師は義子の脈搏を計り、更に心臓に耳を押しつけてから、

「この子は男の子か、それとも女の子か？」

と瀬利子に尋ねた。

「男の子に決つとるがね！」

苛立たしげに答える男に、

「いえ女の子です」

と瀬利子は否定した。

長いハルピンからの旅で大人の女でも髪を短く切つていたので、ましてや垢と泥にまみれた子供の性別など分からなかつたのも無理はない。

老医師は内ポケットから大切そうに聴診器を取り出して診察すると、「これは栄養失調だ」と呟いた。

「引揚者の殆どがこれにいかれている。大人なら体力で持てても、この赤ん坊ではとても……」

老医師は聴診器を外した。そこですかさず男が、

「先生！ 生きとるのか、死んだのかどっちじゃ！」

と怒鳴つた。

「まだ心臓は動いとる」

「先生！ どうしたらいいんです！」

瀬利子は叫んだ。

「どうするもこうするも、わしも薬は持つとらん。まあ佐世保まで持てば、向うに薬ぐらいあると思うが……」

「先生！」と男は医師の胸ぐらをぐいと掴んで、

「栄養が足りせんのなら栄養を補給すればよいのだろう

が」

瞬間男は立つと、自分の私物らしき布製の国防色の鞆を持つて来て中身をぶちまけた。

床にぶちまけられた薬は三十種類もあつたろうか。あとと驚く老医師に、男は、

「この中で間に合う薬があるのんか！」

その薬を調べる老医師の眼が次第に輝いて来て、その中の二、三種類を取り出した。

「これなら何とかなりそうじゃ」

「先生」と男は再び胸ぐらを掴んで、顔を近付けると、

「先生よ！ この俺の薬を使うからには、もし死なせたら海の中へ叩きこむぞ！」

「しかし……」

「しかし……」

「しかしもへちまもない！ これが他の病氣としたら俺も何も言わん。けど、ただ栄養が足りんだけなら何とかなるじゃろ。何とかしたれ」

「わかつた……」

老医師もこんな荒っぽい男にかかつては詮方なしと思つたのであろう。老医師は瀬利子にその錠剤を渡し、

「あんたが噛みくだいて少しずつ飲ませてあげなさい」

と瀬利子の手の小粒の薬を十錠程渡した。

瀬利子はその薬を懸命に噛み、口うつしで義子の口に入れた。

義子が再び泣き声を出したのは佐世保の港へ着く寸前であつた。

「義子！ 生き返った！」

思わず頬ずりをして抱きかかえると、かの男の姿を探しに廻つた。

その男は五人の男達と甲板に車座になっていて、
「では無事の帰還に乾杯しようじゃないか」

と紹興酒を注いでいる時だつた。その中には船の乗組員も一人入っていた。

薬から酒まで揃えているその男を見て「何て人なんだろ」と思ひはしたが、瀬利子にとってはやはり義子の命の恩人であつた。

「ありがとうございます。お陰で子供は助かりました」

甲板に手をつく瀬利子を見て男は、

「佐世保港に着いたら、もっとよい医者も居るだろうから診てもらつてやる」

「本当に……何とお礼を申しましてよいやら……」

「奥さん。俺も岐阜県人だ。いやここに居る三人の者も皆岐阜県人だ。ほんだから助けただけだ。紹介しとこう。この男は大井、川原、青木だ。俺の名前は知つとるな？」

「いえ、申しわけございませんが、子供のことで、頭が

一杯で……」

「おい！ みんな」と男は言つた。「この船の中で俺の名前を知らせん者が居た。しかもそれが岐阜出身だと……」

「まあ高木さん、そうかつかしなさんな。奥さんこの人は岐阜市出身の高木勇之助さんと言つて満鉄でも顔は利くし、終戦後は占領軍とかけ合つて治安維持や、食料品の割当てに奔走して下さつたお方だわ」

大井という男がそう説明した。

「そんなことも知れせん……」と瀬利子は夫の召集の為に、最近ハルビンへ子供二人を連れて来たことを告げていた。

高木も事情が分かると「そういうことか」と納得を見せ、

「心配せんでも佐世保へ降りたら一番に医者に診せてやるから」

と言つてくれたが、その時急に船が停つた。

「何だ？ これは……」

船員は立ち去つたが、間もなく戻つて来ると、
「どうやら佐世保には入港出来んらしい」

と伝えていた。

「どういふことだ」

「今無電が入つて佐世保の前の引揚者の中にコレラ患者

が出たらしい」

「何だと……するとどうなる？」

「暫く港の外で待たされるか、それとも他の港へ入るか、どっちかだろう」

瀬利子の眼の前は急に暗くなって来た。

「こっちにも病人が居ると伝えてくれ」

「そんなことを言ったら余計に長引く」

「どうしてだ？」

「こっちにもコレラ患者が居ると疑われる」

「こっちは子供の栄養失調だぞ！」

「高木さん、言つてはなんだが、今国民の殆どが栄養失調なんだ。栄養失調なんか病気の中には入らんのだ」

船員はそっけなく言うと言つて再び立ち去って行つた。

「そんなに内地もひどいのか……」

誰かが呟いた。

「まさか戦争が終つて日本人の人情がなくなったわけはないだろう」

高木は茶碗代りの空缶に入つた酒をぐいと飲み干すと、

「俺がかけて来てやる」

と立ち上がつて来た。

「かけ合つてもどうにもなるものか……」

「いや、やつならどうにかなる。あの強引きでやればな」

その男の名前は紹介されたが、瀬利子は覚えていなかった。

それから二十分程経つと船は動き出して港に向つていった。

「見てみる。やつのかけ合ひは成功したんだ」

瀬利子がはつと吐息をついたのは、抱いている義子が再び泣かぬようになつていたからである。

そして船は佐世保港に入港したが、上陸は許されなかつた。

やがて検疫官が乗りこんで来て、

「体の悪いのは誰だ？」

と尋ねた。

「この子です」

真つ先に瀬利子は義子を見せると簡単な診察で、

「これはコレラではない」

と断定した。

「けど、この子は死にかけています。何とかお薬を

……」

「我々は伝染病の担当だ」

とすげない返事が返つて来た。

「でも、この子はこのままでは死ぬのです」

検疫官は舌打ちした。

「我々はあくまで伝染病の……」

「それはわかつとる！」

いつの間にか傍へ来てくれたのは高木であった。

「君達も検疫官となれば医者だろう。医者ならば人命を救うのが使命ではないか！ それとも伝染病患者を捜しては、見つかったと喜んでおるのか！」

二人居た検疫官の若い方が気色ばんだ。

「何も喜んでるんじゃないやありませんよ。我々は伝染病が日本へ上陸するのを防ぐのが仕事なんです。他の病氣については担当の医師が居ます」

「言っておくが我々は国の繁栄の爲にと満洲で働かされ、約一年もかかってやっと祖国へたどりついた。言うなら国の犠牲者なんだぞ！ その犠牲者を温かく迎えようとしてくれるのが君達同胞じゃないか！ すぐこの子を診察して手当をしてやってくれ！」

高木の口調は鋭く否応言わせざる何かがあった。

「診てやれ」

もう一人の歳取った検疫官が言うのと、高木は怒鳴った。「診てやれとは何事だ！ せめて診て上げなさいと言えないのか！ お前は俺達を差別しているのか！」

「そうじゃない。自分は元軍医だった。部下に命令する時は、習慣でこんな言葉が出るのだ」

「そうか。習慣なら仕方がない。で軍医さん、元の階級は何か？」

「中尉だ」

「俺は中佐だ！ 頼む、いや命令だ！ この子供の命を救ってやれ！ いいな！」

「ハッ」と検疫官は敬礼をした。

高木とは奇妙な男であった。

軍人上がりでないことは誰もが知っていた。もし高木が軍人なら、シベリヤへ連れて行かれていたからである。とは言え、中佐と自称しても疑えぬ實禄めいたものが、この高木の身についていたのも確かであった。

義子は診察されてビタミン剤の注射を受けた。

注射針を刺された時、かすかな泣き声を上げたのは、まだ生命の保証がある証拠だと瀬利子は喜んだ。

高木はその元中尉の軍医が去る時に「明日からも頼みますぞ！」と今度は自分から敬礼をして、軍医をうろたえさせた。

「高木さん、何と言ってお礼を申してよいか……」

「いやかまわん……」と高木は笑うと、

「この俺は中佐どころか、徴兵に取られるのがいやさで満洲へ逃げとったんじや。満洲と内地と次々と現住所を移してのう。日本で召集令状が来ると満洲へ行った後。満洲へ来るとまた日本へ移した後。要は頭の使い方次第じゃ」

高木は笑った。

しかし、結局船は佐世保港に十日間停められ上陸出来なかった。

そして十一日目、船が西へ向うのを知るや引揚者達は動揺した。

「どこへ連れて行かれる……」

その時も高木は早く情報を仕入れていた。

「みんな心配せんでもええ。この船は九州を一廻りして瀬戸内海に入る。恐らく呉あたりの港に入るんじゃないろう。その上に毛布や食料品も佐世保で積んだ。だから安心して乗ってりゃええ」

事実、毛布も支給されたし、食料品も三度三度高木達グループから渡された。

瀬利子は高木からこっそり倍もの食料品を買った。

「子供に食べさせてやれ」

「すみません」

他の引揚者達に悪いと思ったが、義子の命を助ける為に甘んじて受取った。

そして義子の体は徐々に回復して行つた。

九州を廻り瀬戸内海へ入るまで、更に三日かかった。

しかし引揚者達にはもう動揺がなかった。見える両岸

が日本の土地だったからである。

だが肉眼で見えるその土地に生々しい戦災の跡を目撃すると、急に不安が高まった。

瀬利子も岐阜が戦災を受けていることは既に聞いていた。

夫は帰っていず、舅や姑、二人の子供を抱えどうして生きて行けばよいかと考えたからである。

ハルピンに居る時は、何とか内地へ戻りたい一心であった。だが内地へ戻れたら今度は生きねばならぬのである。

ましてや白日の広島を目撃した時、引揚者の女達は慄然とした。

この原爆で日本が終戦をやむなくしたとは聞いてはいたが、見渡す限り焼け野原で、終戦一年たった今でも、僅かに掘立小屋らしきものが立っているだけであつたからである。

「私の妹がこの広島に居たのよ！」

甲板からその光景を見て、瀬利子の隣りに居た女が悲痛な叫びをあげると泣き崩れた。

瀬利子はその女の背を撫ぜながら、

「どこかに逃げておられるかも知れません。そう思うてあげないと……」

「逃げられる筈がありません」

冷たく言い切ったのはかの高木であった。

「高木さん」と瀬利子は初めて抗議の目を向けた。

「考えてみる。こりゃ普通の爆弾じゃなかったんだぞ。

長崎を通った時は夜でようわかれじゃなかったが、長崎もこれと同じだ。乗組員の話では十年、いや二十年は草の芽も生ええせんと言っとる。人間が助かる筈があれせんほんだから、まずあきらめることだな。あきらめて万が一生きとったら飲びに繋がるだろうが」

ここで瀬利子は再び高木なる男が他の人間と些か違うことを知った。

通常の人間なら、こんな時無駄とは知っても慰めることだろう。しかし高木はわざと突き放すようなことを言ったからである。

そこに通常の人間ではない何かがあった。しかもそんな高木に誰もが反抗しない。いや反抗し難い何かを有する男なのである。決して巨体でもなくむしろ中肉で小柄であった。

瀬利子はふとヒットラーを思い浮かべた。

高木が佐世保に着く前から口髭を生やし出したからではない。自分の思惑通りに事が運ばねば承知しない男であったからである。

そして年齢こそ若かったが何となくヒットラーに似た面影があった。

だが、高木は瀬利子にとっては恩人であった。

瀬利子達が上陸して内地の土を踏んだのはその翌日であった。

それが呉であるか、どこかは誰も知ろうとしなかった。内地の土——。ただそれでよかったのである。

臨時に上陸したとあって、援護局の出迎えもなかった。だが、そこでも高木は激昂した。

「国の為に満洲へ行っていた俺達を出迎えるのに湯茶の一杯も出さぬとは何事だ！ それでも同じ日本人なのか！」

「高木さん、まあまあ……」

と制したのは同じハルピン帰りの一人、大井であった。それから瀬利子達一行は山陽線に乗った。沿線に見える町々はかつてハルピンへ向った時の一年前の町とはかなり変っていた。

田園はのどかきを見せていたが、都会らしき町へ来ると生々しい戦火の跡があった。

勿論バラック建てに等しい小屋のような家は建っていたが、それが見るからに急造らしいだけに一層悲惨さを物語っていた。

「さあ弁当だ」

どこから支給されるのか知らないが、高木は必ず瀬利子に四人分くれた。

それだけでなく、も僅かな量の弁当を一人分余分に貰うことに瀬利子は気が引けたし、現に周囲の白い眼を意識して辞退すると、

「かまやせん。子供の業だ」

高木は堂々と言つてのけた。

「そら高木はんはあんたに気があるんやから、喜んで食べたらええ」

後の座席に居た中年女の皮肉に、高木は、

「もう一回言つてみろ！」

と怒鳴つた。

「この俺は色気で左右される男ではねやあぞ！ あやまれ！」

「すんまへん」と不貞腐れる女の腕を掴んで「土下座して詫びろ！」と命じる高木に、さすがにたまりかねた傍に居た大男の亭主が、「何をする！」と高木の胸ぐらを掴んだが、途端に高木はその亭主の額を殴りつけていた。

ヒットラー——。

瀬利子はまたしてもそう感じたのは、高木が、

「ええか。俺はこの引揚隊の責任者だ。俺の命令にさからう者は、たつた今からこの汽車から突き降ろしてやる！」

と言つたからである。

「どうだ！ 返事をしろ」

一同はおびえたように首を横に振つた。

「ようし。ほんでええ。但し言つとくが、この俺は岐阜の人間だ。ほんだからまず岐阜の人間を優先する。岐阜出身の人間は手を上げろ」

七、八人が手を上げた。その中の四、五人を指し、

「お前達はわかつとる。まんだ他にいたのか！」

と残りの者の所へ行き、驚いたことには弁当を一つずつ配つたことである。

さすがに車内はざわついた。

「文句があるのか！」

高木は一喝した。

「言つとくが、この弁当はこの俺が当局にかけ合つて数を誤魔化して取つた弁当だ。俺の力で取つた弁当を俺が好きにしてもええだろう」

これが彼の理論であつた。

郷土愛と言うのであろうか。しかし単なる郷土愛だけでなく、それ以上の何かが存すると瀬利子は思った。

山陽路から東海道へ入ろうとするにつれ姫路、神戸、大阪と益々被爆の恐ろしさの跡をまぎまぎと見せつけられ、岐阜はどうなのだろうかと瀬利子の心は痛み続けた。

「おじいちゃんやおばあちゃん……」

幼な心にもそんな不安を感じるのか、信男が初めて祖父母のことを口に出したのも痛ましかった。